

# ウイグル字音史大概

高田時雄

一 はじめに……………	三二九頁	三 もう一つの字音……………	三三八頁
二 《慈悲懺音字》と《法華經音》の韻母體系……………	三三〇頁	四 まとめ……………	三四一頁

## 一 はじめに

イスラム化する以前の、主として佛教を奉じた古代ウイグル民族が独自の漢字音の體系を有していたであろうことを、かつて論じたことがある。<sup>(1)</sup> そのとき論證に用いた材料はトルファン盆地から發見された二種類の佛書音の小斷片、すなわち東ドイツ科學アカデミー所藏の《慈悲懺音字》(Ch. 3245: T III D83-100)とイスタンブール大學現藏の《法華經音》(假題)(同大學所藏トルファン文書 No. 22)とであったが、その分析に當たって、聲調と聲母についての議論だけをひとまず優先し、韻母については、しばらく取り扱わないことにしてあった。いまウイグル字音史の概觀を試みるに當たって、話をその韻母の議論から始めようと思う。

上記二種の音注資料では、聲調・聲母の両面にわたって著しい通用がみられた。聲調については、音節末に破裂音韻尾をもつたため音形そのものが他とはことなる入聲は別として、平・上・去の三聲間の區別はほぼ無視されていたといつてよ

い。聲母についても、たとえば中國音韻學にいう三十六字母は、唇音・舌音・牙喉音・齒音など調音部位をおなじくするものの合併を中心として、おおむね十四類に統合されていたと解される。その詳細は前稿を参照していただくとして、ともかくこのような聲調・聲母における合併から想像される體系はあまりにも簡素なもので、生きた漢語を反映するものであるとは殆ど考えにくい體のものである。上記資料に反映された音系が、現實の漢語音ではなく、ウイグル語に取り入れられ、その音韻體系により同化されたウイグル字音にはかならないと考えたのは、まさにこの理由に基づくものであった。このことは聲調と聲母の分析のみで十分に支持されるはずであるが、韻母の體系について状況がどうなっているかを見てもおくことは字音の性格を知る上で極めて重要なことである。

## 二 《慈悲懺音字》と《法華經音》の韻母體系

以下には先ず、二資料の音注を韻攝ごとに整理して検討してみよう。被音注字と音注に用いられた文字とが同一攝の内に納まるものを表Aに、その枠組みを越えて音注しているものを表Bに示す<sup>3)</sup>。そして表Aにおいて各攝ごとに区分した中をさらに點線によって區切つてあるのは、點線より前が同一韻母字による音注であるのに對し、點線以降の音注が同攝内にありつつも開合・等位など韻母を異にする文字による音注である。以下、比較のため必要に応じて十世紀河西方言形に言及する場合がある。表Aから見よう。

〔果・假攝〕《法華》の「施音唾」は開合が異なるが、ウイグル字音では合口要素が捨象されていたものであろうか。このように開合の別を無視した音注は他攝にも例があり、聲母の種類如何に關わらない。《慈悲懺》の「嗟音差」は表面的に

は一・二等の通用例となるが、聲符を同じくする文字による音注であって、この種の例に多くの意味を求めるのは無理がある。他の都合五例は同一韻母による音注である。

〔遇攝〕《慈悲懺》、《法華》に各一例、魚（語）韻と虞（麌・遇）韻の通用が見える。（楚音注、徐音取）ここでは恐らくどちらにも母音 $\text{ɤ}$ あるいは $\text{o}$ を考えるべきものと思われる。しかしこのような魚虞兩韻の近さは、實は十世紀河西方言とは際だった對比を示すものである。河西方言では、魚韻は $\text{y/}$ 、虞韻は $\text{ɤ/}$ と考えられ、前者は止攝開口字としばしば通用される事はあっても、虞韻と通じることがきわめて稀であった。この點は注意を要する。また《慈悲懺》に一等字と三等字の通用例が二例見える。上に見た合口要素の場合と同じく拗音要素も無視される傾向にあったものかとも思われるが、「餘音烏」の如き例はウイグル語の音韻體系内部でも、例えば $\text{m}$ と $\text{ɲ}$ として語頭子音の有無により簡単に區別できた筈であって、單純には解し難い點がある。今しばらく後考を俟つ。

〔蟹攝〕蟹攝では、點線以降の例が多いので、一見大きな合併が起こっている様に思われるが、仔細に見ると同一等位の韻どうしの音注、すなわち一等海・代韻（哈韻の上・去聲）・隊韻（代韻の合口）と泰韻、二等の怪韻と夬韻の音注の多いのがわかる。これらの韻はいわゆる一・二等重韻と言われるもので、唐代の早い時期にすでに合併していた韻である。ここでは問題とするに足りない。また一・二等を通じての音注も相當數見られるが、これはウイグル字音としては一・二等の $\text{a}$ 母音の廣狹を區別しえない筈であるから當然とせねばならない。むしろ問題とすべきは「怪音蓋」であって、一・二等の違い以外に開合の區別も無視されている。これは頭子音が牙音で、本來開合の區別がもっとも現われやすい条件にある。それでもなおかつ合口要素が捨象されていることは注意を引くものである。

〔止攝〕《法華》の4例を除き、他の音注は支・脂・之・微韻を通用している。この止攝四韻の合併は漢語史内部でも十分説明可能なものであるが、ウイグル字音としても至極當然のことといえる。



	冀音其 開三至—開三之 伊音衣 開三脂—開三微 唯音爲 合三脂—合三支 維音爲 合三脂—合三支	萎〔音喂 合三支—合三眞 冀音其 開三至—開三之 姨音以 開三脂—開三止 譬音四 開三紙—開三至 馳音之 開三支—開三之
效攝	翹許小 開三宵—開三小 孝音教 開二效—開二效 條音鳥 開四蕭—開四篠 保音寶 開一皓—開一皓	闌如交 開二效—開二肴 稿音高 開一皓—開一豪 逃音道 開一豪—開一皓 討音道 開一皓—開一皓 眇音妙 開三小—開三笑 皺音周 開三有—開三尤
流攝	尤音由 開三尤—開三尤 留音流 開三尤—開三尤 投音頭 開一侯—開一侯 謬皮九 開三幼—開三有	
咸攝	陷音咸 開二陷—開二咸 兼許念 開四添—開四添 炎音嚴 開三鹽—開三嚴 湛之三 開二謙—開一談 瞻之念 開三鹽—開四添 斂□念 開三鹽—開四添	攬樂甘 開一敢—開一談 點音念 開四添—開四添 坎音甘 開一感—開一談 鹽音嚴 開三鹽—開三嚴 獵力劫 開三葉—開三葉 接四劫 開三葉—開三葉
山攝	寔音品 開三寔—開三寔 殘音散 開一寒—開一翰 凜音散 開一寒—開一翰 牽音堅 開四先—開四先	質音任 開三沁—開三沁 闌主善 開三彌—開三彌 穿音專 合三仙—合三仙 薦音千 開四霰—開四先

ウイグル字音史大概

・二等に-an(ar)・三・四等に-en(er)を想定できる。ここでも開・合を越えた音注が一例(關音聞)見られるのが注意される。

「臻攝」「旬音寸」という音注は、ともに合口字ながら三等字を一等字で音注したかたちになっている。こういう場合は三等の拗音要素が捨象されたものと見なし、sun を考えるのが無難である。「旬」はともかく、「寸」にsun を考えるのは不可能であろう。臻攝の字音は基本的には開口  $\text{ɕ}$ 、合口  $\text{ɕ}$  と考えてよい(三等合口ならば  $\text{ɕ}$ )。しかし「續音本」はなかなか厄介である。「本」は普通には bun と考えられるが、同韻字の「門」などの唇音字はウイグル文獻中に  $\text{MN}$  で寫され實際には  $\text{ɕ}$  を表しているから、いま「本」に bin 音を考えることは可能である。ただそれでも「續」字は眞韻の韻圖四等欄に置かれる文字で、漢語原音でも本來口蓋性の強い介音を持っていた。ウイグル字音でも當然 bin となるはずであって、bin とは考えにくい。何らかの理由で

曾攝	升音乘 開三蒸—開三蒸	墨音嘿 開一德—開一德
宕攝	管音觀 合—緩—合—桓 割古達 開—曷—開—曷 裂力舌 開三薛—開三薛 炭音但 開一翰—開一翰 電音天 開四霰—開四先 返音反 合三阮—合三阮 拔音八 開二黠—開二黠	敗音天 開四先—開四先 伐音發 合三月—合三月 抹音末 合—末—合—末
臻攝	陳音眞 開三眞—開三眞 欣音近 開三殷—開三隱 旬音寸 合三諄—合—恩 殞音云 合三軫—合三文	脰音眞 開三軫—開三眞 勲音熏 合二文—合二文 熏音勲 合二文—合二文 拂音佛 合三物—合三物 續音本 開三眞—合—混
	賤音千 開三線—開四先 焉一千 開三仙—開四先 遣音堅 開四獮—開四先 免音便 開三獮—開四線	關音間 合二刪—合二山 褰音見 開三仙—開四霰 券音玄 合三願—合四先

bin と讀まれるようになっていたものであろうか。いまのところ不明としかいいようがない。

〔宕攝〕 宕攝は同音音注のみ。すなわち點線より左の例がない。

〔曾攝〕 曾攝も同音音注の枠を出るものが少ない。唯一例「馮平等」は反切による音注であるが、反切下字「等」が一等字で、歸字「馮」が三等字であることが一見奇妙に感じられる。しかし曾攝はおそらく一・三等ともに *u* (*iu*) であってみれば、このような音注は有り得るものとしなければならぬ。

〔通攝〕 この攝では點線より左に二例あり、ともに東韻三等と鍾韻との通用である。漢語史から見ると、「慧琳音義」では、この二韻母を區別するが、十世紀河西方言では對應する入聲韻を除き合流している。字音としても同じ *(iu)* を考えてよいと思われる。しかし後述するように、このウイグル字音の基礎となった漢語原音が比較的古いものとすれば最初は母音 *iu*/*o* の區別を有したものが後にウイ

通攝	拯音稱 開三拯—開三蒸 式音食 開三職—開三職 馮平等 開三蒸—開一等 窮音弓 合三東—合三東 忍女六 合三屋—合三屋 聰音從 合三東—合三鍾 [糝]音龍 合三東—合三鍾	敕音直 開三職—開三職 殖音食 開三職—開三職 [獄]音曲 合三燭—合三燭
梗攝	警音敬 開三梗—開三映 整音正 開三靜—開三勁 慶音經 開三映—開四青	坑音更 開二庚—開二庚 騁音正 開三靜—開三勁 幸音行 開二歌—開二庚

表B：攝の枠組みを越えて音注するもの

止攝—遇攝	《慈悲懺音字》 慰音於 合三未—合三魚 追音主 合三脂—合三蟹 墜音主 合三至—合三蟹	《法華經音》 委音於 合三紙—合三魚 醉音取 合三至—合三蟹
流攝—遇攝	覆音父 開三有—合三蟹	
山攝—臻攝		艱音根 開二山—開一痕
江攝—通攝	卓主六 開一覺—合三屋	
曾攝—梗攝	冰音平 開三蒸—開三庚	磔音力 開四錫—開三職
梗攝—宕攝		頃音強 合三靜—開三陽

グル化することによって合流したものと解さねばならない。

「梗攝」 梗攝の場合も三・四等韻の通用と、二等韻の通用のみで、攝内部ではとくに説明が必要な音注はない。

表Bは攝の枠組みを越えて音注するもので、表Aに比べると當然ながらその数が極めて少なく、合計しても十一例にすぎない。かつその中には偏傍を同じくするための読み違いに基づくもの（艱音根）や、字形の類似からの誤りと考えられるもの（頃音強、頃を頃と讀んだものか？）も含んでいる。半数に近い五例というかなりまとまった數で現れるのは、その中であって、止攝合口と遇攝合口の通用である。止攝合口字は敦煌の藏漢對音資料で、ㄩと寫されることが普通であり、同じ敦煌の音注類でもこのことと同じような遇攝合口虞韻との通用が見られる。止攝合口字は漢語原音でもすでに末尾のㄩ音を弱化させており、聞こえの上では、ㄩに相當接近していたもの

と思われる。ウイグル字音はこれを反映したものと考えてよい。ただし藏漢對音などの資料が反映する漢語では、魚韻との通用は稀であつて、ここで「慰音於」や「委音於」のような音注が現れているのは注目すべき相違點である。

その他の音注を見ると、まず「覆音父」は、尤韻屑音字が輕屑音化を経て虞韻に轉じていたとされる「慧琳音義」に見える如き状態を反映するもので、漢語史から説明が可能である。「卓主六「反」」については、歸字に *coy* が期待されるに關わらず反切下字からすれば *cy* とならざるを得ない點に説明の困難が存在する。單なる音注時における疏漏か、あるいは「卓」字が *coy* から *cy* に轉じていたものであろうか。ウイグル文字では *co* と *o* とは同じ文字 *W* で表記されるために文字面では轉音の條件が無くはないといえるが、一例のみであるため決定的なことはいえない。曾攝と梗攝の通用が二例見られるが、これは三・四等ではウイグル字音の母音がともに *ɨ* であつたために起こつたものと考えられる。すなわち「冰音平」ではともに *biŋ* が想定され、「磔音力」では *liŋ* が想定される。

表 B は以上で盡きるが、ここで注意を喚起しておきたいことは、例えば十世紀敦煌で作られた音注類に類見するような、梗攝字が蟹攝字の音注に用いられるといった例が皆無だということである。この種の音注例が十世紀敦煌では極めて數多く、それらがむしろ普通のものとなつてゐることに比べて非常に目だつ點であることは強調してよい。

以上、《慈悲懺》と《法華》の音注を各攝ごとに分かつて簡単に眺めた。その結果を総合すると、これら二種の音注資料は韻母の通用の面で、(一)一・二等間の母音の區別がなされないこと、(二)合口要素がしばしば捨象されること、(三)拗音要素も時に無視されることがある、といった特徴を有し、漢語としての本來あるべき區別を逸脱してウイグル的な側面を垣間見せている。これらは聲母・聲調の面における大幅な合併と平行した、韻母におけるウイグル字音的性格と考えてよい。しかし韻母體系全體から判斷される漢語原音は果たして何時いかなる時代のいかなる種類のものかという点、韻攝の枠を越えて音注するものが極めて少ないことから知られるとおり、かなり保守的な性格をもっている。それは上にも少

し觸れたように、十世紀の河西方言音と比較すれば分かりやすい。十世紀河西方言の音韻では、漢語史的脈絡においてさまざまな新しい改變を示す中であって、なかならず梗攝・宕攝のㄐ韻尾が主母音を鼻音化させつつ消失するという點が際だった特徴であった。敦煌藏經洞發見の藏漢對音資料第二類<sup>10</sup>やコータン・ブラーフミー文字轉寫資料など（これらは十世紀のものと考えられる）で、梗攝字・宕攝字を寫す場合、ㄐ韻尾がまったく表記されないことや、十世紀敦煌寫本の別字・異文及び音注類などで梗攝字が蟹攝字としばしば通用するなどほまさにこの音韻特徴を反映するものである。しかるにいま我々が扱っている二種の佛書音がこういった特徴をまったく示さないことは、少なくともその漢語原音が河西の方言音とは別種のものであったことを物語っている。とすればその漢語原音の由來は何に求めるべきか。

さて唐代以降の河西地方の、個別具體的には敦煌という土地における漢語方言の消長を跡づける材料を、幸いにしてわれわれはかなり豊富に有っている。敦煌藏經洞發見の藏漢對音資料第一類は第二類に比べて古い性格をもった資料であるが、これらの資料はラサの唐蕃會盟碑の對音と近い性格を有し、八世紀から九世紀にかけての首都長安の言語を反映していると考えられる。そこでは宕攝・梗攝はほぼ完全に保たれて *-ang*, *-eng* のように寫され、河西方言を反映する第二類の資料が *o*, *ə* のように寫すのと對照的な扱いを見せる。そして後者の扱いこそが、上記の河西方言諸資料に共通の扱いでもあった。これを歴史的に解釋すれば次のようなことになる。すなわち敦煌では唐代の標準語たる長安方言が中央の行政用語として壓倒的な規範力をもっていたが、敦煌では785年に始まる前後七〇年に及ぶ吐蕃支配期、さらにはその後を承けた880年以後の歸義軍政權下において次第に河西土着の方言が有力になり、十世紀になると中央政府との關係も一層微弱になり、ついには既に實質上獨立した小國家たる曹氏歸義軍のもとでは長安方言の影響からまったく脱却したのである。これは敦煌を中心とした河西地方の出來事であるが、同じことがトルファンでも生起したと考えて決して不思議ではなからう。唐盛時の名残たる長安方言の漸次的な衰微と土着方言の相對的な地位向上である。ウイグルがモンゴリアの

故地を逐われて東部天山の南北麓に移住するのは九世紀半ばのことであるが、そこにはかつての長安方言も讀書音の形で残っていたと考えられるし、また話し言葉としての土着方言も存在していた。ウイグル字音の體系はおそらく長安方言（あるいはそのトルファン的な變異形）を基礎としていたと思われる。その音系が敦煌の藏漢對音資料第一類に近いのはそのためである。さらに言えば、藏漢對音資料第一類では、河西方言の影響を受けて、魚韻が止攝開口字と同じく $\cdot$ で寫されることが多い。しかし會盟碑の對音ではこの現象は皆無であり、むしろ魚韻は虞韻と同じく $\cdot$ で書かれている。これは上で見たとようにウイグル字音の扱いと一致する。これはウイグル字音が長安方言に基づくと考えられるいま一つの根據である。

### 三 もう一つの字音

ここで一旦ウイグル文獻自身に眼を轉じると、そこに現れる漢語由來語彙の音韻體系は實に河西方言型のそれであることが知られている。<sup>(11)</sup> もっとも豊富に漢語語彙を含む文獻は十世紀末から十一世紀初頭に活動した北庭出身のウイグル僧シニコ・サリ・トゥトゥン (Sīngōsālītūnūn || 勝光闍梨都統)<sup>(12)</sup> が譯出した《慈恩傳》であるが、以後十四世紀に至るまでウイグル文獻に見える漢語の音形式は基本的にすべてこの方式に従っている。そうすると我々は《慈悲懺》、《法華》という佛書音注に基づき、その體系をウイグル字音の體系と考えているわけであるから、ウイグル文獻の反映する漢語音はウイグル字音ではなく、また翻つて言うならばウイグル字音はウイグル文獻中に用いられた漢語に反映されていないということになってしまふ。われわれが今、ウイグル字音と考えている體系はあるいは佛典讀誦音というような役割を擔った字音であったものかも知れない。九世紀、ウイグルがトルファン地方を手中にした時、かの地にはなお多くの漢人僧がいたと考えられるが、日常の會話はともかく、その經典讀誦に使用したのは唐代の標準音だったのであろう。ウイグルは中國佛

教を攝取していく過程でこの經典讀誦音をもまた採用したのである。しかしてこの地方で日常用いられる漢語は御多分に洩れず河西方言型のものであって、ウイグルが漢語から佛典を自らの言語に翻譯する時には、讀誦音を用いずに自然とこの河西方言型のを採用したのである。ウイグル譯「天地八陽神呪經」のロンドン本は敦煌藏經洞發見品で、その事實からも十一世紀初頭を下らないと考えられるものであるが、小田壽典氏は、そこに見えるインド系借用語がウイグル文獻では早い時期に豫想されるソグド語形に基づき、また漢字の陽の音譯がトルファン本の *yo* ではなく、*yang* になっていることなどからロンドン本のテキストがトルファン本よりも古いと考えている。<sup>13)</sup> 小田氏の考えは勿論正しいと思われるが、私見にしたがえばロンドン本は唐代標準音がなまじく經典讀誦音に踳躄しておらず、經題の音寫に方言形の *pa* *yo ki* を以てするには躊躇された時代の産物ということになる。すなわち漢語からのウイグル譯としては最も古い層に屬するものといえる。

經典讀誦音としてのウイグル字音の傳統は比較的早くに成立し、前稿で述べたように、少なくとも元代後期までは存続したと思われるが、時の推移にしたがいウイグル文獻に現れるような河西方言型の字音體系もまたそれとは別個に字音として形成されて行つたのではないかと考えられる節がある。

ハンガリーのカラ氏が紹介した資料に、次のような漢語の佛教韻文をウイグル文字で轉寫したものが存在する。<sup>14)</sup>

yu viy šu lay yoq yoq šin / yi č[a]y gay šu saq gay qiv<a>

又爲如來浴浴身以齋戒水塞戒垢

ši qan č[a]y gay yi viy šing / ši qu ki li si si ši

世間齋戒以爲勝是故敬禮清淨師

この資料については寫真もなく文書學的な情報が一切缺如しており時代を想定する手だてがないのだが、言語的にははっきりとした特徴を持っている。敬 *ɣ*、清 *s*、淨 *ʃ* のように梗攝字が *ɣ* で寫されて曾攝字の勝の *ɣ* と對立しているのは、ウイグル文獻中の漢語の扱いと同じで、まさに河西方言型の證據である。これを生きた漢語をそのままにウイグル字で寫したものと考えることももちろん可能であろうが、漢語原音がそれぞれ清母 (*\*s*)、從母 (*\*p*) である「清」、「淨」とともに *s* と寫しているのなどは、すでにウイグル化した字音が背景にあるとするほうが分かりやすいように思える。十世紀末かあるいは十一世紀の初頭、シンコ・サリ・トゥトゥンが「慈恩傳」を譯した時には努めて實際の漢語音を寫そうとしたように思われるが、そのとき漢語の齒頭音は多くが *ʃ* で表わされているのである。

この種の字音體系が別に存在した明かな證據は、十三世紀末のいわゆるピントゥン文書と呼ばれる契約文書にある。<sup>(16)</sup> この文書はあわせて四種の文書からなるが、漢文・ウイグル文兩文で書かれている第一文書の漢文部分に「定惠」として現れる人物が、第四文書の *tigui taisi* という人物に當たることは間違いない。<sup>(16)</sup> ここでは「定」が *ting* ではなく *ng* を落とした *ɣ* で寫されている。あるいは *tigui* の *ɣ* を「定」という漢字で寫している。その關係のどちらが實際に即しているか、ここでは特に問わずともよい。この文書はすでに元朝期のものであって、この時代になると元朝期に特有のおそらく大都音であると思われる新しい音體系が流入し盛んに用いられ始めた。第三文書に現れる官職名の按察使 *ancasi* はまさに入聲韻尾のないこの新しい形を用いている。新しい音は「赤都護高昌王世助碑」<sup>(17)</sup>、「大元肅州路也可達魯花赤世襲之碑」<sup>(18)</sup> といった十四世紀の碑文類には普通に使用されているものである。十干や建除十二神の名前などは特別な借用語彙として、元朝期の音が用いられている中にも古い音形式を保存し續けたというようなことは考え易いが、「定惠」は人名であるからこのように考えるわけにはいかない。どうしても背景に字音の存在を考えねば理解が難しいのである。同様に、第一文書の漢文部分に見える「阿體」は第一・第二・第三文書すべてに見え、*adai* となっている。「體」は元朝期

大都音を反映すると考えてよい。「中原音韻」では齊・微韻に屬し、その音は $\text{tɕi}$ となっていたはずである。また「慈恩傳」でも蟹攝四等字を $\text{Y}(\text{ɕ})$ で寫しているから、ここに $\text{dai}$ となっているのはずっと古い字音を考えねば説明がつかないであろう。<sup>(20)</sup>ともあれ元朝當代の音とは異なった字音が存在したことの傍證の一ではある。

Abitaki という題記をもつ一群のウイグル寫本が存在する。これが阿彌陀經の音寫であることは一目にして明かであるが、實際には阿彌陀經そのものではなく、白蓮社が關係する諸經論を雜揉して作り上げたものだと言われる。そして實際に  $\text{paq lin si ki}$  (白蓮社經) の名も現れているという。百濟康義氏とペーター・ツィーメ氏は、この經の音寫形式が「元朝代の音寫と異っており、唐代から宋代あたりまでの音と推定される。この點から、本書は宋代ごろまでにウイグル語譯されたもの」と考えた。<sup>(21)</sup>なるほど、abitaki にせよ  $\text{paqlinsiki}$  にせよ明瞭にシンコ・サリ以來の河西方言型の音形をもっている。しかしこれでもし字音であるとすれば、百濟・ツィーメ氏の議論は成立の基盤を失うであろう。元代の翻譯でも有り得るとせねばならない。また白蓮社の宗派經典が宋代以前にウイグル語譯される可能性がどれほどのものか、専門外の筆者には議論する資格はない。ただ、ここでは漢語の音形からテキストの時代判定を行うのは、字音の存在を考慮するならばそう簡単な問題ではないことを言っておきたいのである。

#### 四 ま と め

わが國の字音は漢音・吳音・唐音などの多くの層をもち、それぞれが複雑に絡み合つて存在している。しかしこのような複雑さは中國文明と繼續的な接觸を有つてきた國の字音においては多少にかかわらず存在すると言える。朝鮮字音しかり、越南字音しかりである。トルファン地方はウイグル國の成立以前から漢人の王朝が存在したこともあり、中國との關

わりが長くかつ深い。ウイグル國になってからも漢文の經典や經音、また字書や韻書はこの國に絶え間なく流入した。經音や字書韻書の存在はばらばらな語彙としての漢語ではなく、體系としての字音を支える上で本質的な役割を演ずる。冷静に考えればこの地に独自の字音が成立しないほうが不思議といつてよい。ともあれ上にはウイグルに二種の字音體系の存在した可能性について述べた。一は經典讀誦音としてのそれであり、一はそらういった制限のない字音である。

## 注

- (1) 「ウイグル字音考」、『東方學』第七十輯(一九八五)、一三四—一五〇頁。
- (2) 注(1)に同じ。
- (3) 表A・Bにおいて「□音○」は、□が被音注字であり、○が音注に用いられた文字である。あいだに音の字を用いず、例えば「邁莫介」のようになっているものは、被音注字「邁」が直音でなく反切「莫介」によって表されていることを示す。又、各項目下には、被音注字と音注字の中古音韻類を開合の別・等位・所屬韻によって示しておいた。その際、いわゆる三等重紐韻a類は四等の扱いにしておいた。
- (4) 聲調は必ずしも同一とは限らない。
- (5) 河西方言の定義及び實際については拙著『敦煌資料による中國語史の研究』(東京、創文社、一九八八)を参照された。
- (6) 「背音貝」も開合が無視されているように見える例である。しかし漢語音としては唇音の場合、音韻上の開合對立がないので無視してよい。韻書における歸屬が、背字を含めた唇音字を開口の代韻に入れずに合口の餘韻に入れているためにこういうことになる。
- (7) より正確には、「慧琳音義」では幽韻は尤韻のうち介音がㄨである一類と合流し、介音がㄨであるもう一類とは對立していた。この「謬皮九「反」という例では、反切下字「九」が後者の類に屬するから、
- (8) 嚴密には違う音である。しかしこの區別もやがては消滅するもので、ウイグル字音としてもその差異は區別不可能だったはずである。
- (9) ウイグル文獻中に「寸」字は實際に sun, tsun の形で現れるが、sun で現れることはない。
- (10) ウイグル文「慈恩傳」他。YNのような大文字表記はウイグル文字表記の翻字(transliteration)を示し、轉寫形(transcription)と區別する。
- (11) チベット文字轉寫資料は、標準音的色彩を帯びる第一類資料とまったく河西方言的な第二類資料とに分けられる。
- (12) 庄垣内正弘「ウイグル文獻に導入された漢語に関する研究」、『内陸アジア言語の研究Ⅱ』(神戸市外國語大學・外國學研究十七)、神戸、一九八六。
- (13) シンコ・サリはウイグル佛教初期の佛典翻譯に活躍した人物で、他にも「金光明最勝王經」などの經典の翻譯を行ったことが知られている。「慈恩傳」の譯出年代についてはシンコ・サリの活動年代については、ガバイン・馮家昇・ハミルトンなどに説がありこれまで必ずしも一定していなかったが、今では大約このように考えてよいと思われる。参照：森安孝夫「チベット文字で書かれたウイグル文佛教教理問答(1923)の研究」、『大阪大學文學部紀要』第二十五卷、一九八五、五九—一六〇頁。

- (13) 小田壽典「龍谷大學圖書館藏ウイグル文八陽經の斷片拾遺」、『内陸アジア・西アジアの社會と文化』一九八三、一六一—一六二頁。「陽」字の音譯の問題に關しては注(十一)に掲げた庄垣内氏の論文九七—九八頁も參照のこと。
- (14) 梅村坦「ジョルジIIカラ教授の講演」、『東洋文庫書報』第十四號、一九八二、七三—七四頁。漢字還元はカラ氏による。
- (15) 山田信夫「回鶻文斌通(善斌)賣身契三種」、『東洋史研究』第二十七卷第二號、一九六八、七九—一〇四。文書の年代比定はこの論文による。またビントゥン文書は山田氏に先だつて馮家昇及びソヴィエトの捷尼舍夫によつて發表された。『考古學報』一九五八年第二期、一〇九—二一〇頁、また *Проблема Востоковедения* 1960—3, pp. 142—149.
- (16) *tigui taisi* はビントゥンの名前が現れない別の文書にも出る。馮家昇「回鶻文契約二種」、『文物』一九六〇年第六期、三三—三四頁。
- (17) 耿世民「回鶻文亦都護高昌王世助碑研究」、『考古學報』一九八〇年第四期、五一—五二九頁。
- (18) 耿世民「回鶻文《大元肅州路也可達魯花赤世裏之碑》譯釋」、『向達先生記念論文集』、ウルムチ、一九八六、四四〇—四五四頁。
- (19) この種の語が出現する曆書・占書のウイグル寫本は G. R. Rachmat,

- (Turkische Turfan Texte W (APAW) 1936, Nr. 12) に集められてゐる。それによつて摘記すると、十干は甲 qap(qip), 乙 bür, 丙 pit, 丁 tū, 戊 buu, 己 ki, 庚 qir, 辛 sin, 壬 sim(šim), 癸 kuud, 建除十二神は建 kin, 除 čur, 滿 man, 平 pit, 定 tir, 執 čip, 破 pa, 危 kuud, 成 ci(ç), 收 šin, 開 ar, 閉 pi と寫されており、いうまでもなく河西方言型である。ただしこういつた語も新しい元朝の音形に書き換えられているような寫本も若干存在はしており(Nr. 14, 18)、時代の趨勢を感じさせる。庄垣内前掲論文二一七—一九九頁參照。ちなみに Rachmat の論文には平 pi と閉 pi とを取り違えて逆にしてゐる箇所があるが(Nr. 2) 曆のサイクルの順序にしたがい上のように訂正すべきである。母音調和を無視すれば、表記上は adar は adai, かもしれず、それならばわれわれが經典讀誦音と讀んだ層の字音だと考へ得る。《慈悲懺》や《法華》の音注では、蟹攝四等が止攝と通ずる例が皆無で、蟹攝四等字がなお上ではなく、e のような二重母音であつたと考へられるからである。ついでながら「唐蕃會盟碑」の對音は a, ya, o などで見られている。
- (21) ベーター・ツィーメ、百濟康義『ウイグル語の觀無量壽經』、一九八五、京都、二三一—二四頁。

(注記) この論文は昭和六三年度稻盛財團助成金による研究成果の一部である。